

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00312

研究課題名（和文）太宰治研究資料の情報ネットワークの構築

研究課題名（英文）Establishment of an information network for Dazai Osamu research materials

研究代表者

安藤 宏（ANDO, Hiroshi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：30193113

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：太宰治の研究資料に関し、日本近代文学館、山梨立文学館、青森県近代文学館、三鷹市スポーツと文化財団ほか各地の公共施設と連絡を取り合い、展示の協力、新資料収集の橋渡し、情報交換等を行った。こうした活動を通して得られた知見を元に、太宰治に関する永年の研究を集めた『太宰治論』（東京大学出版会、2021年12月、1184p）を刊行した。また、その過程で収集した数多くの複写資料を製本整理し、公共機関に寄贈する準備を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

太宰治の重要資料の発掘、公開促進、さらには文学館の展示等の催しに協力することができ、文学館、資料館と研究者との相互連携の前例を作ることができたと考える。また、そのこうした調査の成果を生かした『太宰治論』（東京大学出版会、2021年12月）が、2024年3月に日本学士院賞を受賞し、特別資料を生かした近代文学研究のあり方として、社会的な評価を得ることができたものと考えている。

研究成果の概要（英文）：Regarding research materials on Dazai Osamu, I kept in touch with the Japan Museum of Modern Literature, the Yamanashi Literature Museum, the Aomori Museum of Modern Literature, the Mitaka City Sports and Culture Foundation, and other public facilities around Japan, cooperated in exhibitions, served as a bridge for collecting new materials, exchanged information, and so on. Based on the knowledge gained through these activities, I published "Dazai Osamu: The Work and Life" (University of Tokyo Press, December 2021, 1184p), a compilation of my long years of research on Dazai Osamu. In addition, I was able to prepare for the donation to public institutions of a number of photocopied materials collected in the process of this project by binding and arranging them.

研究分野：日本近代文学

キーワード：太宰治 近代文学 小説 文学館 直筆資料

1. 研究開始当初の背景

(1) 太宰治の文学は60カ国を超える国々で翻訳されるなど、世界的な存在であり、その研究資料の基盤整備は、あらゆる意味で、日本文化の国際発信と国内における近代文学研究におけるモデルケースとして重要な意味を持っている。

この30年の間に、太宰治に関する直筆資料の存在が次々に明らかになり、本格的な研究環境が整いつつある。研究代表者はこれまでも『太宰治全集』第13巻(筑摩書房、1991年)で草稿の翻刻を行い、また日本近代文学館「太宰治文庫」のデジタル化、オンライン化(2014年)作業に携わるなど、資料の基盤整備に努めてきたが、こうした資料は、その後、学界に於いて、必ずしも具体的な研究成果に結実しているとは言えない。日本近代文学における直筆資料の研究はまだ草創期にあり、今後、太宰治を一つのモデルケースに、これまでの基盤整備の上に立った実証研究を具体的な成果として示していくことが求められている。

(2) 文学館を中心とする各種の公共施設は個別に太宰治の資料の収集を進めており、相互の情報交換、ならびに研究者と学芸員とを繋ぐ情報網は、これまで決して充分とは言えなかった。資料のデジタル化、オンライン化の流れも踏まえ、相互のネットワークを構築していくことが求められている。

(3) 先端的な研究と、読者のニーズや地元の顕彰事業との間には関心や問題意識に開きがあり、「太宰治」を一個の文化資産として後世に残して行くに当たっては、両者、特に研究者の側の社会発信の努力が不可欠である。

2. 研究の目的

(1) 全国の公共機関の所蔵する太宰治関連資料の情報のデジタル化、オンライン化を推進し、研究者がこれを共有できる環境を整えること。

(2) 現在三鷹市で進められている太宰治顕彰事業を基点に、全国の公共機関との連携を深め、情報の共有化に向けたネットワークを構築し、学界における最前線の研究と、地域文化としての「太宰治」との橋渡しを行うこと。

(3) 上記の成果を生かした太宰治の文献実証的な研究を実践し、近代文学における直筆資料の活用について、具体的な提案を行うこと。なお、本研究は2015~2018年の申請者の基盤研究(C)「太宰治直筆資料のデジタル化、オンライン公開に関する基盤整備の研究」の継続発展をめざすものである。

3. 研究の方法

(1) 未発表資料の翻刻、公開

全国の関係機関には、資料はあるものの未公開のもの、保存方法に問題があり、手立てを講じなければならぬもの、担当者が交代するうちに資料の情報、価値が曖昧に

なっているもの、個人蔵の重要資料で、所蔵者が変わるうちに所在が不明確になるか、散逸してしまったものも数多く、それらの現状を整理し、リスト化する。それらも含め、研究代表者が30年以上の歳月にわたって収集してきた資料を整理し（複写資料の製本、PDF化等）、公共機関、研究者が利用できる環境を整える。

（2）三鷹市の太宰治顕彰事業等との連携

現在三鷹市で太宰治の顕彰事業が進んでいる。「太宰治記念館」の設立に向け、市の関係者と適宜、協議を行っている。また、三鷹市スポーツと文化財団に寄託・寄贈される資料を把握し、整理・公開に関する助力を行う。

ちなみに研究代表者はこれまで約20年の間、全国の太宰治関係資料、個人所蔵者、公共機関の関係者、報道関係者と密接なネットワークを構築してきた。青森、山梨、三鷹はそれぞれ地域文化としての「太宰治」の顕彰事業に取り組んでおり、学界の研究成果をそこに織り込むことによって、学術と地域文化の育成とが高度に両立しうるものであるという確信を得ることが出来た。本研究期間内にも三鷹、青森で顕彰事業を行うことが予定されているので、それらに積極的に関わることにより、研究成果の一般読者への一層の理解を図り、文化資源としての「太宰治」の推進に寄与することができる。

（3）太宰治文学の文献実証的な研究の実践、社会的発信

資料は、いかに貴重なものであろうとも、これが具体的に活用されなければ意味をなさない。この点をめぐって、申請者これまでの太宰研究の文献学的な成果を、本研究期間内に研究書として公刊すべく、現在準備を進めた。求められるべきは「表現」「人間」「時代」の三要素の相互関係を文献実証によって明らかにしていく方法の確立であろう。研究代表者がこれまで執筆途中であった『太宰治論』の、資料的に未調査であった部分を本研究の情報ネットワークによって補い、これを公刊するならば、今後の文学研究に大いに資することができる。

4．研究成果

（1）各地の文学館の企画協力、ならびに関係者（学芸員等）との情報交換

2020年度、2021年度はコロナ禍のため、各地の文学館で多くの事業が休止となったため、当初予定していた青森への出張を中止するなど、計画の進行に様々な支障が生じたのは事実である。その中で、研究期間中に行うことのできた主な活動を掲出する。

・2021年12月8日 三鷹市スポーツと文化財団「太宰治展示室 三鷹の此の小さい家」オープンセレモニーに出席した。同施設は三鷹駅前の美術ギャラリーに常設されたもので、太宰治の三鷹市在住時の自宅を再現し、合わせて常設展・企画展を行う施設である。かねてより準備の相談役を務め、解説のパネルの執筆などの協力を行った。なお、同展示室の企画展示、「太宰治と生きるー津島美知子の決意と生涯」（2022年7月～10月）、「太宰治より愛なる鱈崎潤へ」（同年10月～2023年1月）を初めとする各種企画への助力を行ったほか、同市に寄託・寄贈された鱈崎潤、石井立等、太宰治関係資料に関する助言を行った。三鷹市および三鷹市スポーツと文化財団とは、このほかにも既存の「太宰治サロン」の展示計画、資料の受け入れ等について、継続的に協議を行っている。

・21年11月6日に富山市の高志の国文学館にて講演「太宰治と志賀直哉」を行い、同館で開催されていた「太宰治展」に関し、学芸員と交流、情報交換を行った。なお、同「太宰治展」は、2019年に日本近代文学館で研究代表者の編集した「太宰治展 創作の舞台裏」の内容を一部変更してリバイバルしたものである。

・同年11月12日 北海道北見市にて東京大学文学部公開講座が行われ、「近代小説の誕生」と題し、太宰治の文体をとりあげて講演を行った。

・2022年5月22日～28日に青森県に主張し、太宰の宿泊した浅虫温泉椿館、大鱈温泉ヤマニ仙遊館、ならびに五所川原市の太宰治記念館斜陽館、太宰治生家ゆかりの側島家旧宅（かなぎ元気村）の調査を行った。青森県立高校、青森県近代文学館、東奥日報、弘前市立郷土文学館の関係者、郷土史研究者と懇談し、研究情報の交換を行った。

・2022年7月12日に長野県安曇野市文書館にて講演「太宰治と臼井吉見」を行い、また翌年の10月28日、塩尻市立図書館にて講演（古田晁記念館文学サロン）「古田晁と太宰治「人間失格」」を行った。臼井吉見と古田晁は同郷で、筑摩書房関係者として太宰治と密接な関わりを持っており、地元の関係者と懇談し、多くの情報収集を行った。

・2022年に講演活動として、6月11日に東京大学文学部公開講座「太宰治の文体－近代小説の「言」と「文」」、10月22日に桐光学園「太宰治文学の魅力」、11月16日に昭和女子大学日文特別講演会「太宰治と近代作家たち－芥川龍之介・川端康成・志賀直哉」を行った。本研究の成果を社会発信する上で、一定の成果を上げたものとする。

（2）本研究に直接関わる執筆出版活動（社会的発信）

・プランゲ文庫の検閲資料の検討

かねてより共同研究の形で進めていた、太宰の戦中戦後の本文、プランゲ文庫の検閲の実態について、その成果を安藤宏・斎藤理生編『太宰治 単行本にたどる検閲の影』（秀明大学出版会、2020年10月）にまとめた。特にプランゲ文庫の太宰治の検閲資料に関しては初めての本格的な調査であり、重要な研究成果を発信することができたものとする。ちなみに研究代表者の執筆担当は「『佳日』から『黄村先生言葉録』へ」「『お伽草紙』」「『パンドラの函』」の3章である。

・『太宰治論』の刊行

かねてより執筆準備を進めていた太宰治の研究書（単著）に関し、本研究の一環としてそのとりまとめを行い、2021年12月に東京大学出版会設立70周年事業の一環として、これを刊行した。全1184頁。構成は「序 太宰治の時空間」「第部 揺籃期」「第部 「晩年」の世界」「第部 中期の作品世界」「第部 戦中から戦後へ」、全43章48のコラムから成る。同書においては本研究を始め、これまで調査してきた太宰治の自筆資料が数多く分析の対象になっており、その所在の情報に関する最新の調査結果が記されている。また、デジタル化された資料の研究への応用の、一つの具体的な提案になりうるものとする。資料の基盤整備（伝記、書誌、原稿の調査研究、本文の校訂）と表現研究（内容論的解釈、文体分析）、同時代の歴史、文化との相互関係の考察は、文学研究の三大要素とも言えるものだが、これらが相互に密接にリンクした総合的な研究は一般に大きな困難を伴う。本書は、本研究において構築された情報ネットワークを基盤にその包括的な考察が

実践され、研究方法に関する一つの提案が試みられている。

なお、この書の合評会が2022年8月30日に大妻女子大学で行われ、各地の太宰治研究者の討議、情報交換、交流の場になったことも付言しておきたい。

社会的な評価としてはこのほか、同書は「読売新聞」（2022・2・22）、「図書新聞」（同・5・21）等で書評として取り上げられ、また、本研究期間の終了間際（2024年3月12日）に、日本学士院賞の受賞が決定した。本研究の学術的な価値が認知されたものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安藤宏	4. 巻 6月21日
2. 論文標題 文学研究の醍醐味－『太宰治論』を上梓して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京新聞	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤宏	4. 巻 58
2. 論文標題 「れんげ忌」を体験して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 常念とれんげ	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤宏	4. 巻 153
2. 論文標題 『あひどき』の系譜	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 iichiko	6. 最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤宏	4. 巻 16
2. 論文標題 太宰治「斜陽」における“ホロビ”の美学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学国文学論集	6. 最初と最後の頁 105 - 121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安藤宏
2. 発表標題 太宰治の文学－川端康成と志賀直哉の関わりを中心に
3. 学会等名 和洋女子大学（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安藤宏
2. 発表標題 古田晁と太宰治「人間失格」
3. 学会等名 古田晁記念館文学サロン（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安藤宏
2. 発表標題 泉鏡花「高野聖」の世界
3. 学会等名 新宿区文化観光課（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安藤宏
2. 発表標題 草稿から見えてくるもの「大江健三郎文庫」開設を記念して
3. 学会等名 日仏会館・加藤周一記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 安藤宏・大原祐治・十重田裕一（編集代表）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 787
3. 書名 坂口安吾大事典	

1. 著者名 安藤宏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 1184
3. 書名 太宰治論	

1. 著者名 安藤宏・斎藤理生共編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 秀明大学出版会	5. 総ページ数 154
3. 書名 太宰治 単行本にたどる検閲の影	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------